

平成 2 5 年 9 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859）

下長淵三田氏館跡

青梅市長淵一丁目に、「下長淵三田氏館跡」と称される場所がある。三田氏とは、鎌倉時代中期から永禄 4（1561）年頃まで、勝沼（現在の東青梅地区）に本拠地を置き、奥多摩町から羽村市、そして埼玉県旧高麗郡や旧入間郡にも勢力を及ぼしていた豪族である。三田氏の居城であった勝沼城は、光明寺の背後に横たわる丘陵地内に、現在も空堀と土塁から構成される城跡が残っており、東京都の史跡に指定されている。

下長淵三田氏館跡に向うには、万場坂のバス停で下車する。友田の方向へ十数m進むと、左手に生活道路があり、生活道路を進むと下り坂となるが、下り坂の東側一帯が館跡である。付近は畑地と住宅地であるが、すべて私有地であるため、許可無く立入るのはマナー違反である。住宅地図と、青梅市教育委員会が発行した『青梅市の中世城館跡』を片手に、付近を踏査する。

付近の地形は、多摩川によって形成された河岸段丘である。河岸段丘とは大きな河川に沿って分布する階段状の地形で、平坦な場所は段丘面、急な斜面を段丘崖^{だんきゅうがい}と呼ぶ。バス道路の南側に沿って急斜面が延びているが、この斜面は段丘崖、バス停から多摩川に向って広がる平坦地は段丘面である。

生活道路の西側には、長淵丘陵から流れて来た鳶巣川^{とびす}が多摩川に向って流れ、段丘面を深く下刻している。生活道路を先へ降りていくと、10 軒以上の住宅がある平坦地で、その先は多摩川の河原となっている。地図によると、館跡は、段丘面の北西端付近に位置し、段丘崖の高さは 13～14m である。

青梅市教育委員会が発行した『皇国地誌・西多摩郡村誌（上）』に掲載されている下長淵村誌には、「宅地ハ古ヘノ陣營ノ跡ナリトテ縦壹丁、横二丁許ノ地、四周湊址」とあるが、付近には、そのような場所が残っていない。同村誌は、今から 136 年も前の明治 11（1877）年に書かれた報告書である。当時は、まだ残っていたのであろう。

どのような理由で、このような位置に三田氏は館を置いたのであろうか。

地図によると、館跡は段丘崖の縁にあり、多摩川を見下ろすには見晴らしが良い場所である。多摩川の対岸も河岸段丘で、千ヶ瀬から河辺へ延びる二段の段丘崖があり、仮に勝沼方向から段丘崖を下って来る集団があれば、即座に見つけられる。

多摩川は、道路交通の大きな障害である。勝沼方向から南方のあきる野（二宮・小川）や八王子（横山・平山）などへ向うには、多摩川を渡らなければならないが、南岸の長淵から友田にかけても、高さ 10m 以上の段丘崖が上流から下流に沿って聳え、段丘崖を上れる場所は少ない。鳶巣川が曲流しながら多摩川に合流する、この位置は段丘崖を上れる数少ない場所のひとつである。上流にある下奥多摩橋は昭和 8（1933）年に架設されたが、それまでは、この位置にあった「河辺の渡し」で、北岸と南岸の人々は往来していた。

以上のことから、三田氏は展望が良く、勝沼（北岸）とあきる野（南岸）を結ぶ渡頭地点のこの位置に、防御を兼ねた館を設けたのであろう。

なお、万場坂^{ばん ば}の地名は万場^{よろず ば}ではなく、当初は「馬場^{ば ば}」で、武者が乗馬の練習をする場所に由来する地名と考えられる。

（文責 角田 清美）